

我が国の重症心身障害児看護に関する研究の動向

木浪 智佳子・川崎 ゆかり・三国 久美

目的：我が国における重症児看護に関する先行研究を検討し、重症児看護向上のための方策を考える。

方法：医学中央雑誌Web版ver. 5（収載1983～2012年）をデータベースとし、施設で働く看護師、入所中の児、入所中の児をもつ親を研究対象とした15文献を検討した。

結果：施設で働く看護師が抱える困難やストレス、課題の上位を占めていたのは「児の病気や障害の理解」「児のニーズの把握」「児との関係構築」といった看護の基本的知識・技術に関する内容であった。看護師は主に自らの経験知、他の看護師の模倣を手掛かりにしながら児に対する看護の方法を確立していた。

結論：現存する重症児看護の研修内容や専門教育機関、児に対する看護の状況を探ることにより、看護師が抱える重症児看護に対する困難や課題を克服できるような教育環境の充実、延いては重症児看護の向上に貢献することが示唆された。

キーワード：重症心身障害児看護　看護師　専門教育

I はじめに

小児看護に携わる看護師は、小児専門病院や一般病棟の小児外来・病棟、障害児施設、在宅看護といった様々な場で療養する子ども達を看護している。そして、小児看護の専門性を高めるために、職場内外で開催される研修に参加することで自らの知識の研鑽を積んでいる看護師も少なくない。日本看護協会が認定する専門看護師と認定看護師分野においても、小児看護専門看護師、新生児集中ケア認定看護師、小児救急看護認定看護師を数多く輩出し、小児看護および看護師の質の向上に取り組んでいる。

小児看護に携わる看護師が勤務する場の一つに重症心身障害児施設がある。重症心身障害児（者）施設は「重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複している児童を入所させて、これを保護するとともに、治療及び日常生活の指導をすることを目的とする施設（児童福祉法第43条の4）」と定められており、医療施設としての機能と児童福祉施設としての機能を併せもった施設である。この規定において、重症心身障害児（以下、重症児とす

る）は「重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複している児童」とあるように、一人の児が抱える疾患や身体状況は複雑で多岐にわたっている。それゆえ、重症児の心身の状態は常に不安定であり、その殆どは言語的コミュニケーションにも困難を来していることから、自らの体調不良や要求を看護師や周囲の者に自発的に伝えることができないという特徴がある。このような特徴をもつ重症児に関わる看護師にとって、児自身を理解し、身体的・情緒的状况を把握したうえで、適切な看護をすることは容易ではない。そのため、障害児に関する専門的知識や技術を学んだうえで看護することが望まれる。しかしながら、従来の専門看護師および認定看護師養成課程には、障害児看護の専門性を学ぶ課程はなく、重症心身障害児施設で働く看護師達が学習する機会は、他の施設に勤務する看護師たちに比べ少ないのが現状である。そこで、我が国における重症児看護に関する先行研究を検討し、重症児看護向上のための方策を考えることを目的とした。

II 研究方法

医学中央雑誌Web版ver. 5を用い、検索年数を2000～2012年、キーワードを「重症心身障害児施設・看護師」

北海道医療大学看護福祉学部看護学科
母子看護学講座 小児看護学

とし検索した結果、93件が検索された。これら93件を論文種類が原著論文として登録されている24文献に限定し、研究対象別に分類した。その結果、最も多かったのは重症児施設に勤務する看護師や介護職員全般を対象とした研究で21件、次いで入所中の児を対象とした研究が2件、児の家族を対象とした研究が1件であった。

さらに、重症児施設に勤務する看護師・介護職員を対象とした21文献のうち、看護師や介護職員を含む重症児のケアに関わる職員全般を研究対象としている6文献、施設自体を対象としている1文献、勤務先が学校の配属になっている看護師を対象とした1文献、ターミナル期の看護ケアに関する1文献を除外した12件を有用文献とした。

最終的に、重症児施設で勤務する看護師のみを対象とした研究論文12件、入所中の児を対象とした研究論文2件、児の家族を対象とした研究論文1件の計15件を有用文献とし分析の対象とした。

Ⅲ 結 果

1. 重症児施設に勤務する看護師を対象とした研究の動向と内容(表1)

対象とした12文献のうち原著論文は10件、研究報告が1件、事例研究が1件であった。分析方法は質的研究が6件、量的研究が5件、その他1件であった。研究目的では、施設での看護のやりがいや困難感、ストレス、課題、役割を明らかにしたものが7件と最も多く、重症児と看護師との関わりの場面で看護師に生ずる思いや事象を明らかにしたものが2件、看護師に対する教育の効果を調査したものが1件、児の親との関わりにおけるプロセスを明らかにした研究が1件、重症児施設における事故防止への取り組みの実態調査が1件となっていた。

1) 看護師のやりがいや困難感、ストレス、課題、役割

木村ら¹⁾は重症児施設で働く看護師にとっての看護の「やりがい」を調査した結果、①利用者の反応の発見、②利用者との相互作用、③療育の学びや気づき、④家族との信頼関係、⑤スタッフの協力により利用者の状態が改善する、⑥ケア提供により健康状態が維持・改善される、⑦ケア提供を通して自分自身の変化を認識する、の7つのカテゴリーを見出した。中でも①利用者の反応の発見、③療育の学びや気づき、は今回の研究対象者に最も特徴的な項目であると報告している。また、利用者の反応を察する能力は重症児(者)看護において最も求められる能力であり、異常の早期発見や利用者の能力の発見に繋がるため、ここに看護師がやりがいを見出していることが看護師のモチベーションを高め、ケアの質の向上に繋がる一助になると考察している。しかし、これら

の能力を看護師が培う方策については触れていない。

落合ら²⁾は新人・中堅の看護師833名に対して重症児看護の困難さ・魅力・専門性についてアンケート調査を実施し、新人と中堅とで比較分析を行った。その結果、新人・中堅の「看護の困難さ」の1位と2位はともに「重症児のニーズの把握」「重症児の病気や障害の理解」であり、いずれも新人の方が困難さを高く感じていた。「看護の魅力」については、新人も中堅も1位は「重症児とのコミュニケーション」、2位は「重症児の生活介護・生活支援」、3位は「重症児との関係構築」の順で上位を占めていた。新人より中堅が魅力を感じているのは、「重症児の病気や障害の理解」「重症児のニーズの把握」「重症児の成長発達への援助」「重症児とのコミュニケーション」で、新人の方が魅力を高く感じていたのは「重症児の生活介護・生活支援」「重症児との関係構築」「重症児のQOL向上への支援」であった。「看護の専門性」については、新人・中堅とも1位が「重症児の病気・障害の理解」、2位が「重症児の呼吸管理」、新人の3位は「重症児のフィジカルアセスメント」、中堅の3位は「重症児の摂食・嚥下障害への援助」であった。これらの結果を受けて、新人や中堅が同じ「重症児のニーズの把握」「重症児の病気や障害の理解」を困難に感じているのは、個別性を含んだ複雑な病気や障害を理解しようという自己研鑽の不足や、職員研修・育成を施設としてサポートする体制の不整備が原因だと考察している。加えて、新人・中堅が困難に感じている項目は専門性においても必要と感じている項目と共通していることから重症児の看護はより専門的な医療看護技術の習得が必要であるがゆえに、困難さを感じていると示唆している。これらの課題を解決するためにも、キャリアや年代の持つ困難さに対応した研修体制の構築や施設を超えて情報を共有しあうことや段階的、系統的に専門性を高められる研修内容の構築と研修機会の付与の必要性を強調している。

看護師の職場でのストレス、自覚的疲労症状、職務満足度の調査³⁾によると、看護師のストレスの1位は「今の仕事に必要な知識が自分には不足している」であった。ストレス発生状況を持っている看護師は84%以上だが、現在ストレス状態にある者は36%にとどまっていた。自覚的疲労症状については精神的疲労感よりも身体的疲労を自覚する割合が高く、疲労感を自覚している者はその4項目の訴え率が80%以上であった。職務満足度で満足度が最も高いのは「職業的地位」であり、次に「看護師相互の影響」「専門職としての自律」の順となっている。「職業的地位」で満足度の高い順は「私の仕事はいろいろな技術とか知識を必要とする」「私が一生懸命に行っている仕事は、意義も見出せる」「自分が行っている

表1 重症心身障害児施設に勤務する看護師を対象とした研究 (No.は本文中の文献番号に対応する)

No.	文献	論文種類	研究方法	研究対象および目的	結果
1	木村ら (2011)	原著論文	質的研究	看護師11名を対象に、利用者へのケア提供に対するやりがいを明らかにする	7つの「やりがい」:①利用者の反応の発見、②利用者との相互作用、③療育の学びや気づき、④家族との信頼関係、⑤スタッフの協力により利用者の状態が改善する、⑥ケア提供により健康状態が維持・改善される、⑦ケア提供を通して自分自身の変化を認識する
2	落合ら (2010)	原著論文	量的研究	新人・中堅の看護師833名を対象に施設における看護の現状と課題を明らかにする	・新人・中堅の“看護の困難さ”の1位と2位はともに「重症児のニーズの把握」「重症児の病気や障害の理解」 ・新人・中堅の“看護の魅力”は「重症児とのコミュニケーション」「重症児の生活介護・生活支援」「重症児との関係構築」の順で上位を占めていた ・新人・中堅の“看護の専門性”の1位は「重症児の病気・障害の理解」、2位は「重症児の呼吸管理」だった
3	深沢ら (2006)	原著論文	量的研究	看護師25名を対象に看護師の職場でのストレス、自覚的疲労症状、職務満足度の実態を把握する	看護師のストレスの1位は「今の仕事に必要な知識が自分には不足している」 ・ストレス発生状況を持っている割合は84%以上だが、現在ストレス状態にある割合は36% ・自覚的疲労症状は精神的疲労感よりも身体的疲労を自覚する割合が高く、疲労感を自覚している者は4項目が80%以上であった ・職務満足度で満足度が最も高いのは「職業的地位」
4	工藤ら (2009)	原著論文	質的研究	看護師7名を対象に腸痿のある児(者)への関わる上での思いを明らかにする	看護師の思い:①入所者のQOLを向上させたい:知識・技術および経験の差からQOLの向上に差が出る、②不安;チューブトラブルなどの医療事故への危機感からの緊張、③マナーリズム;毎日の処置において細かい処置を煩わしく感じる
5	澤田ら (2006)	原著論文	質的研究	看護師10名(勤務経験3年以上)に実践上の問題を明らかにする	看護師の実践上の問題:①利用者の高齢化に関する問題、②個別的ケアに関する問題、③家族との関係性に関する問題
6	澤田ら (2007)	原著論文	質的研究	看護師10名(看護経験3年以上)のキャリアオーバー(利用者の高齢化)に関する問題を明らかにする	小児期からのキャリアオーバーの問題:①療育における保育活動に関する問題、②家族が利用者の高齢化を理解できない事に関する問題、③看護師が抱える利用者に対する呼称に関する問題、④家族の高齢化に関連した成年後見人制度の利用の問題
7	飯田 (2009)	原著論文	量的研究	115施設の事故防止に向けた取組の現状と、インシデント・アクシデントの発生状況を明らかにする	事故防止対策に向けた組織の構築はされていたが、日常業務に直結した事故防止対策としては稼働してない。インシデント・アクシデントの発生状況では「内服の投薬ミス」が最も多かった
8	伊藤ら (2005)	事例研究	その他(他職種との情報交換、看護記録の分析)	10歳・女兒・コミュニケーション障害をもつ児のケアを通して施設における看護師の役割を検討する	看護師は専門的知識をもち、本人を含めた他職種間のコーディネーターとしての役割を果たす必要がある
9	西藤ら (2010)	原著論文	量的研究	重症児施設に勤務する看護管理者および看護師を対象に、看護職員の需給状況、人材確保・育成に関する実態と課題を明らかにする	マンパワー不足、新卒看護師の高い離職率、人材育成に関する課題(専門・認定看護師の充足、重症児ケアの体系化の確立による重症児看護の認知度上昇、施設間の共同研修実施による職員のモチベーションアップにつなげる)
10	窪田ら (2011)	原著論文	量的研究	看護職員85名を対象に、看護師に対する教育システム導入の効果について明らかにする	施設内のクリニカルラダーの導入により、自己の目標が明確にできる看護師が増加し、離職率の低下と離職理由が明確になり、安定した人材確保に一定の効果がある

11	市江 (2008)	研究報告	質的研究	看護師5名を対象に、重症児・者の反応を理解し、意思疎通が可能となるプロセスを明らかにする	5つのカテゴリとそれに含まれない3つの概念が抽出された。看護師は〈衝撃的体験〉をしながら、〈対象接近方略〉、〈看護実践の多角化〉をはかり、〈対象者把握法確立〉をしていた。重症児・者に“一人の人間として関わる”ことを基盤とし、対象者との〈相乗効果〉をもっていた。関わりには、“確証が持てない思い”を抱きつつ、相手を中心にした看護を考え、お互いの緊張感が解けることで、意思の疎通が可能になっていくというプロセスをたどる
12	角本ら (2009)	原著論文	質的研究	看護師20名（看護経験3年以上）が経験を基盤に親への関わりにおける認識と実践を変化させていくプロセスを明らかにする	〈子へのケアの充実〉、〈親の要望の反映〉、〈共通認識の模索〉、〈平等性の追求〉の4段階が抽出され、《親には安心して子を預けてもらいたい》という思いがこのプロセスを押し進める原動力となっていた

仕事は本当に大切な事をしているといつも思っている」であったことから、看護師達は自分の仕事に満足している様子がうかがえる一方で、今の仕事はいろいろな技術や知識が必要な仕事ではあるが、自分にはその知識が不足しているのではないかという思いがストレスになってきていると推察し、今後の研修計画の工夫や看護師一人ひとりの特性および情緒面にも配慮したサポートが有用な手段だと提案している。深沢ら³⁾の調査結果からは、ストレス状態はそれほど深刻な状態ではない状況やストレス緩和の状態も好ましいことがわかる。また職務満足度の回答内容からも前向きな印象を受けるが、質問紙調査の対象者が25名と量的分析をするには少なく、回収率100%という点からも研究結果の偏りが懸念される。

工藤ら⁴⁾、澤田ら⁵⁾の調査においても看護師の実践上の問題が明らかになっている。工藤ら⁴⁾は、毎日の腸瘻管理が必要な児と関わる看護師7名を対象に面接を行い、重症児と関わる上での思いを明らかにしている。看護師達は、①入所者のQOLを向上させたい、②不安、③マンネリズム、といった思いを抱いており、これらの思いが看護師達の知識、技術及び経験の差、毎日の処置に対する緊張感や煩わしさから生じていると考察している。澤田ら⁵⁾の調査結果では、①利用者の高齢化に関する問題、②個別的ケアに関する問題、③家族との関係性に関する問題が示され、利用者により良いケアを提供するにあたり、これらの問題を早急に解決することが必要だと述べている。しかしながら、具体的な解決方法は示唆されていない。

その他、看護師が抱く問題として、澤田ら⁶⁾は小児期からキャリアオーバーした利用者に対して①療育における保育活動に関する問題、②家族が利用者の高齢化を理解できない事に関する問題、③看護師が抱える利用者に対する呼称に関する問題、④家族の高齢化に関連した成年後見人制度の利用の問題、といった4つの問題を看護

師が抱えていることを明らかにしている。また、施設内に潜在する問題に着目した研究では、飯田⁷⁾が行った日本の重症児（者）施設における事故に関する実態調査がある。日本の115施設の事故防止に向けた取り組みの現状とインシデント・アクシデントの発生状況から明らかになったことは、事故防止対策に向けた組織の構築はされていたが、日常業務に直結した事故防止対策としては稼働していないという現状であった。さらに、インシデント・アクシデントの発生状況で最も多かった項目が「内服の投薬ミス」だったと報告している。

看護師が抱えるやりがいや困難感、ストレス、課題を報告した研究論文が多い一方で、重症児（者）施設における看護師の役割を検討した事例研究⁸⁾もあった。伊藤ら⁸⁾はコミュニケーション障害をもつ児のケアを通して、重症児（者）施設内の看護師は専門的知識をもち、本人を含めた他職種間のコーディネーターとしての役割を果たす必要があると述べている。

2) 重症児施設における看護師の人材育成・研修の実態

重症児施設における看護師の人材確保・育成、研修の実態に関する研究⁹⁾で明確になった実態は、マンパワー不足、新卒看護師の高い離職率、人材育成に関する課題である。そして、これらの課題を解決するためにも、専門・認定看護師の充足、これまで実施してきた看護ケア暗黙知を形式知として体系化し、重症児看護の認知に繋げていく必要があること、施設の垣根を越えた共同研修も職員のモチベーションアップに繋がると提案している。窪田ら¹⁰⁾は看護職員85名を対象に、看護師に対する教育システム導入の効果について調べ、施設内のクリニカルラダーの導入により、自己の目標が明確にできる看護師が増加し、離職率の低下と離職理由が明確になり、安定した人材確保に一定の効果があるという見解を報告している。

3) 看護師と児や親との関わりの中で看護師に生ずるもの

表2 施設へ入所中の児を対象とした研究 (No.は本文中の文献番号に対応する)

No.	文献	論文種類	研究方法	研究対象および目的	結果
13	八川ら (2006)	事例研究	「ストレス対処行動継続的变化図」を元にストレス回避の過程を分析	12歳・女児のストレスを子ども自身で対処できるように「ストレス対処行動継続的变化図」を元に効果的な援助のあり方を検討する	「自己保存」、「自己再建」、「自己確立」の各時期で、看護師、家族・コメディカルが障害を持つ子どもの力を支えその子のペースで回復と成長を促すことが重要となる
14	長谷川ら (2002)	原著論文	看護記録の記載内容から調査	肢体不自由児施設に入所児の幼児～中学生以上の児 (男児40名・女児23名) の入所中のトラブルの実態を明らかにする	・小学校低学年、中学生以上の順でトラブル件数が多い ・看護師の勤務帯では17時～1時の時間帯で最も発生する ・トラブルの特徴は、問題行動や粗暴な行動の多い患者が数人いるとその時に同室であったり、同じ患者が同じ相手とトラブルを起こしている、ことであった

表3 施設入所中の児をもつ家族を対象とした研究 (No. は本文中の文献番号に対応する)

No.	文献	論文種類	研究方法	研究対象および目的	結果
15	飯室ら (2001)	原著論文	質問紙の自由記載内容を分析	重症心身障害児・者に子どもを入所させている親17名を対象に、親の看護者に対するニーズを明らかにする	看護者に対する親のニーズは5つ：①看護者の子どもへの関わり、②看護者の姿勢、③親の子どもに対する思い、④施設への要望、⑤看護者に対する感謝

市江¹¹⁾は看護師5名を対象に、重症児・者の反応を理解し、意思疎通が可能となるプロセスを明らかにした結果、5つのカテゴリーとそれに含まれない3つの概念を抽出した。看護師は〈衝撃的体験〉をしながら、〈対象接近方略〉、〈看護実践の多角化〉をはかり、〈対象者把握法確立〉をしていた。重症児・者に“一人の人間として関わる”ことを基盤とし、対象者との〈相乗効果〉をもっていた。関わりには、“確証が持てない思い”を抱きつつ、相手を中心にした看護を考え、お互いの緊張感が解けることで、意思の疎通が可能になっていくというプロセスをたどっている。

看護師と重症児の親との関わりに関する研究¹²⁾では、看護師20名 (看護経験3年以上) が経験を基盤に親への関わりにおける認識と実践を変化させていくプロセスを記述した結果、〈子へのケアの充実〉、〈親の要望の反映〉、〈共通認識の模索〉、〈平等性の追求〉の4段階が抽出され、《親には安心して子を預けてもらいたい》という思いがこのプロセスを推し進める原動力となっていたことを見出している。

2. 施設入所中の児を対象とした研究の動向と内容 (表2)

対象とした2文献のうち事例研究が1件、原著論文1件であり、分析方法は量的研究であった。これらの研究内容としては、児のストレス対処行動の変化を効果的に援助するための事例検討¹³⁾を行い、児の成長段階の各時期で看護師、家族・コメディカルが障害を持つ子どもの力を支え、その子のペースで回復と成長を促すことが重

要であると考察している。

肢体不自由児施設における入所児のトラブルの実態を明らかにした量的研究¹⁴⁾からは、トラブル件数が多い年齢は小学校低学年、中学生以上の順であり、トラブルが発生しやすい時間帯を看護師の勤務帯で分けると17時～1時に最も発生していた。トラブルの特徴としては、問題行動や粗暴な行動の多い児同士のトラブルを起こしているという状況を報告している。

3. 施設入所中の児をもつ親を対象とした研究の動向と内容 (表3)

対象とした1文献は原著論文であり、子どもを入所させている親の看護者に対するニーズを明らかにするために質問紙の記述内容を分析している¹⁵⁾。明らかになったことは、看護者に対する親のニーズとして①看護者の子どもへの関わり、②看護者の姿勢、③親の子どもに対する思い、④施設への要望、⑤看護者に対する感謝、の5つに分類し報告している。しかしながら、③親の子どもへの思い、⑤看護者に対する感謝、といった分類項目が“親の看護者に対するニーズ”に包含されるのかといった疑問が生じる。

IV 考 察

ここでは、重症児施設に勤務する看護師を対象とした研究論文に限定し、文献検討の結果を踏まえつつ、今後の重症児看護について考察する。

重症児施設で働く看護師には困難、ストレス、課題が

山積していた。文献検討から明らかになった看護師の困難感やストレス、課題の上位を占めていた内容は、「重症児の病気や障害の理解」、「重症児のニーズの把握」「重症児との関係構築」といった看護における基本的知識・技術に関する内容があげられていた。しかし、重症児の身体状況は複雑であり、言語的コミュニケーションによる意思疎通を図ることのできる児は少ない。看護師にとっても、そのような特徴を併せもつ重症児を適切に理解すること自体が容易ではない。このことは、落合ら²⁾の先行研究からもわかるように、たとえ看護経験年数があったとしても、初めて重症児看護を経験する看護師は児の病態や障害、反応を理解するために、自らの経験知や他の看護師や他職種の模倣を手掛かりに試行錯誤しながら児と関わっているのが現状である。こうした看護師の課題を解決するための方策として研修会の充実を提言している研究が殆どであった³⁾⁴⁾⁷⁾。しかしながら、現状の重症児施設が実施している研修には、看護師が困難だと認識している「重症児の病気・障害の理解」や「児のニーズ・反応の把握」は、看護師が学ぶべき最も基本的なことであるにも関わらず、研修内容に組み込まれていない印象がある。

今回の文献検討の結果から、重症児看護師のやりがいとして「利用者の反応の発見」、「利用者との相互作用」が示されていた¹⁾ことから、看護師が自信を持って重症児の病気・障害を理解したり、児のニーズや反応を読みとるためにも専門的な知識・技術を獲得することが必須であり、それが実現することで看護師のやりがいも増え、看護師自身が重症児看護の魅力をより一層実感できると考えられる。

重症児施設において、看護師は看護・介護のリーダーシップをとる立場であることから、重症児看護の専門知識・技術を身に付けた看護師の存在が必要となってくる。残念ながら、日本では重症児看護の専門研修分野が極端に少ない。看護の領域でも障害をもった人々のケアに関する分野の認知度は高いとは言えない。加えて、看護教育のカリキュラムにおいても、看護学生が障害児（者）について学ぶ機会は限られている。前述した、児（者）に関する乏しい学習環境からも、看護師にとっての重症児看護を学ぶ場を確立することが急務である。

今後は、現存する重症児施設の研修内容の実態の把握、専門教育機関の状況の把握、施設で勤務する看護師がどのような方法で、重症児の病気や障害を理解し児のニーズや反応を読みとっているのかといった現状を探ることにより、看護師のニーズに沿った重症児看護の教育環境の充実、延いては重症児看護の向上に貢献すると考える。

引用文献

- 1) 木村美香, 茂木幸子, 斉木栄子: 重症心身障害児(者)施設で働く看護師のケア提供に対するやりがい, 日本看護学会論文集: 小児看護, 41, 158-161, 2011.
- 2) 落合三枝子, 富永孝子: 重症心身障害児看護の困難さ・魅力・専門性に関する施設看護職員の意識調査, 重症心身障害の療育, 5 (2), 257-260, 2010.
- 3) 深沢かつ江, 北村愛子: 重症児(者)施設の看護師のストレスマネジメント 管理者の立場でメンタルヘルス対策を考える, 重症心身障害の療育, 1 (1), 29-33, 2006.
- 4) 工藤靖子, 谷野町子, 高宮枝綾子, 他: 重症心身障害児(者)施設における看護ケアに関わるときの看護師の思い 腸痙のある児(者)への関わりを通して, 日本看護学会論文集: 小児看護, 39, 245-247, 2009.
- 5) 澤田法子, 井上みゆき: 重症心身障害児(者)施設の看護師が語る困難な問題, 日本看護学会論文集: 看護総合, 37, 280-282, 2006.
- 6) 澤田法子, 井上みゆき: 重症心身障害児(者)施設の看護師が語る小児期からのキャリアオーバーに関する問題, 日本看護学会論文集: 小児看護, 37, 251-253, 2007.
- 7) 飯田加寿子, 鈴木江三子: 日本の重症心身障害児施設における事故に関する実態調査, 医療の質・安全学会誌, 4 (4), 505-514, 2009.
- 8) 伊藤紀代, 富田恵子, 山田真代, 他: 重症心身障害児(者)施設における看護師の役割 コミュニケーション障害をもつ児のケアを通して, 小児看護, へるす出版, 28 (6), 788-790, 2005.
- 9) 西藤武美, 有松真木: 看護職員需給状況等調査からみた重症心身障害児施設の課題, 重症心身障害の療育, 5 (2), 239-242, 2010.
- 10) 窪田好恵, 清水房江: 重症心身障害児施設における教育システム導入の影響, 三重看護学誌, 13, 123-130, 2011.
- 11) 市江和子: 重症心身障害児施設に勤務する看護師の重症心身障害児・者の反応を理解し意思疎通が可能となるプロセス, 日本看護研究学会誌, 31 (1), 83-90, 2008.
- 12) 角本京子, 落合亮太, 田中真琴, 他: 重症心身障害児施設で働く看護師が経験を基盤に親への関わりにおける認識と実践を変化させていくプロセスに関する質的研究, 日本看護科学学会誌, 29 (4), 69-

78, 2009.

- 13) 八川晴美, 長谷部玲子: 頸髄損傷児の長期入園におけるストレス対処行動, 日本看護学会論文集: 小児看護, 36, 181-183, 2006.
- 14) 長谷川久子, 飯島眞裕美: 肢体不自由児施設での子ども同士のトラブルの実態調査, 神奈川県立こども医療センター看護研究集録, 26, 42-45, 2002.
- 15) 飯室みさ子, 中込美三子, 北村愛子: 重症心身障害児・者施設に子どもを入所させている親の看護者に対するニーズ, 日本看護学会論文集: 小児看護, 31, 103-105, 2001.

参 考 文 献

- 1) 浅倉次男: 重症心身障害児のトータルケア 新しい発達支援の方向性を求めて, へるす出版, 2006.
- 2) 荒木暁子: 重症心身障がいをもつ子どもと家族における倫理的問題, 小児看護, 35 (8), 994-1000, 2012.
- 3) 八代博子: 重症心身障害児施設における看護管理—人材確保戦略—, 小児看護, 34 (5), 581-585, 2011.
- 4) 加藤令子: 専門看護師制度の概要と小児看護専門看護師への期待, 小児看護, 28 (6), 669-675, 2005.

Recent Trends in the Study of Nursing Care for Severely Handicapped Children in Japan

Chikako KINAMI, Yukari KAWASAKI, Kumi MIKUNI

Purpose : To review studies on nursing care for severely handicapped children in Japan and devise measures to improve such care.

Measures : Based on data published between 1983 and 2012 on the website of Igaku Chuo Zasshi, we examined 15 documents about nurses who are working at facilities, handicapped children who are cared for at facilities and parents who have handicapped children at facilities.

Results : Most of the difficulties, stresses and problems that were reported to be experienced by nurses working at facilities for such children relate to basic nursing knowledge and skills. Nurses established their own ways of giving nursing care for severely handicapped children mainly through their own experience, and through imitating their colleagues at the same facilities.

Conclusion : We need found that examining the existing training courses for nurses taking care of severely handicapped children, institutions for professional nursing education and the current situation of nursing care for them.

Key Words : Nursing severely handicapped children, Nurses, Professional education